

100年、200年先を見据えた事故の後始末計画を！

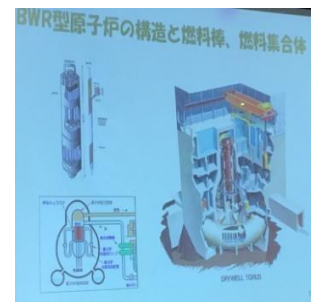
今中哲二さん講演は、当日資料「よつぱつうしん」108号、2020年3月に寄稿された標題の論考にポイントが書かれている。文体を「である調」にして抜粋して紹介したい。

「40年で廃炉」の出处は、東電・政府が発表している「福島第1原発の廃炉に向けた中長期ロードマップ」だが、その中身は「うまくすれば30年～40年で燃料デブリをとりだせる」ということでしかない。デブリとは事故のときにメルトダウンしてしまった核燃料が固まったもので、原子炉容器や格納容器の底に堆積している。猛烈な放射能があるため近づけず、ようやく小さなロボットを格納容器の中に入れてデブリの様子を調べる調査がはじまった。いわば、事故から9年たっても「現場検証」が行われている段階である。

廃炉という言葉を聞くと、壊れた原子炉の跡が更地になるかのような印象をもつが、そんなことは起きない。何とかデブリを取り出して保管容器に収納できたとしても、デブリを引き取ってくれるところはないので、第1原発の敷地で長期保管するしかない。その他に燃料プールから取り出した使用済み燃料、崩れた建物のがれきや機材、汚染水処理に用いた膨大な量の廃棄物なども第1原発の敷地に長期保管されることになる。

福島第1原発の敷地はもともと地下水が多く、崩れた原子炉の建屋に流れ込むため大量の汚染水が発生し続けている。放射能の除去処理をしても、トリチウムという放射能は水素と同じなので汚染水から取り除くことができず、1リットル当たり約100万ベクレルといった高濃度のトリチウム汚染水が、1000基以上のタンクに合計100万トン余り溜まっている。もうじきタンクを増設する場所がなくなるので、東電、経産省、原子力規制委員会が一体となって、増え続けるトリチウム汚染水を希釈して海に捨てる計画を進めようとしている。トリチウムの半減期は12年なので、120年保管すれば1000分の1に、240年たてば100万分の1に減衰する。これ以上余計な放射能は放出しないという方針の下にトリチウム汚染水は長期保管すべきだ。

原発敷地に隣接して、環境省が巨大な中間貯蔵施設を作っている。飯館村などの除染から出たフレコンバッグを運び込む。福島原発事故の後始末が、私たちが生きているうちに終わることはない。30年、40年で何とかなるという場当たりの対策ではなく、私たち、今の世代にできることは、100年、200年先を見据えた後始末計画を立てて、福島原発事故という負の遺産を次世代に引き継いでいくことだと思っている。



(2020年3月18日)